

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



樺島分教会

昭和16年8月26日 設立
昭和26年10月26日 移転建築
昭和48年4月26日 移転

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。



立教187年
6月号

**少年会笠岡団
育成講習会 開催**
5・21 祭典後
少年会



パラバルーンを使ったエクササイズ

少年会(森本忠善団長)は5月の月次祭に育成講習会を開催しました。昨年は子供達にわかりやすい話し方を勉強しました。今年はその上で実際に子供達に教会で楽しく遊んで、しかもおつとめに役立つ事を!と思い計画しました。

祭典講話に代えて少年会本部委員の中村総司先生から、ご自身の子育てをはじめ、自教会での活動を通して少年



ミカンの花の歌でお互いにリズムを



取って手叩くエクササイズ

会活動の大切さ、お助けの大事さなどを教えて頂きました。

又午後からは本部部員の平野先生から、音楽を使って様々なゲームなどを通して、おつとめに必要なリズム感を養う為の実技指導をして頂きました。



先生からの質問に手を挙げる参加者



リズムに合わせて
じゃんけんをするエクササイズ

参加して下さい下さった方々は終始楽しんで受講し、近づいてきたこともおちばがえりや夏休みの教会での活動に活かして下さいと思います。ありがとうございました。

(団長 森本忠善)

《講話内容は次の通り》
笠岡大教会の5月の月次祭典におめでとうございます。また、引き続き育成講習会を開催され、重ねてお祝い申し上げます。

私は普段、千葉県にある大三分教会の会長をつとめております。又、9年前に結婚しまして、今は、5才と1才の子供のお父さんをやっています。どちらも元気な男の子で、毎日教会の廊下を駆け回り回っている息子を追いかけ回すような日々です。その息子と同じ様な世代の子供達も何人かいます。小さい子が一堂に会しますと、毎回教会のどこかが壊れたりとか、何かが無くなったりとか絶対にあるんですね。私の小さい頃もよくあったんですね。そう考えますと、私と同じ時代と一緒に教会で駆け回り回ったメンバーというのは、今の教会の力となってくれています。ですから今、長男と一緒に駆け回り回っている小さい子も、いざれ教会、お道の何かの力になってくれるだろうと考えますと、非常に有難いことであると思えます。少し長男が生まれた時の話をいたします。私、自分の子供ができるのがすごく嬉しくて、出産の時に立会いを希望しました。



少年会活動の大切さを話される中村先生

そうした時、いよいよ長男が生まれてくる頃に、私の携帯が鳴り、一つの連絡が入りました。それは私共の教会は、ブラジルに部内の布教所があり、その布教所にとって、本当に大切な信者さんが、仮にこの人をAさんとします。このAさんの血液にガンができたんです。白血病ですね。命の危険にさらされていますという連絡です。そのAさんは私にとって親戚関係にあり、大変世話になった人でありますので、ショックでした。本人にしてみてもまだ働き盛り、51・2才くらいで、私以上にシヨックだと思えます。急遽、私はおたすけをしにブラジルに向かいました。

予定を教会行事などを考えて組みますと、長男が生まれる出産予定日と重なってしまう。だからといってブラジルに行かないという選択にはならなかった。妻からすると初産なので私がそばにいないと不安な思いをすると考えましたが、夫婦で話し合い、信者さんに留守中のことをお願いしてブラジルに向かいました。そして、到着後すぐさまAさんのもとに駆け付けますと、私の顔を見るや、「あくこれで救った。」と呟き、ありがとうございます。と礼を言うて本当に喜んで下さいました。ブラジルでの10日間滞在中、宿泊している布教所からAさんのもとにおさづけの取り次ぎに毎日通いました。Aさん本人、ご家族、私にとっても本当に内容の濃い期間でありました。そして、帰国中、私はサンパウロのガビロス空港のロビーで妻が分娩室に入ったと聞き、私は教会の青年会のグループLINEにメッセージを送りました。これから飛行機に乗ります。到着は明日の夜8時になりそうです。が、誰か迎えに来れませんか。そのまま病院に送っていただきたい。そのメッセージを送ったのが日本時間の夜中の3時頃でしたので中々既読がつきま

せん。結局既読がつかないまま私は飛行機に乗りました。こうなると日本へ着くまでLINEは見れません。日本からブラジルまで25時間くらいかかり、その間に生まれるという可能性も十分ありました。羽田空港には女子青年さんが迎えに来てくれて、私の顔を見ると「会長さん早く、早く」と焦らせるんです。車の中で状況を聞きますと、まだ生まれてないことは確かです。きつと神様は待ってくれている。そのことに違いないと思ひ、ありがたいなと思ひました。病院に着いて分娩室に案内されると、そこにはお茶を飲みながらテレビを見て笑っている妻の姿があり、私はもうちよつとドラマティックな展開を考えていたのですが、私の顔を見ると笑顔で「あつおかえりなさい」と和やかな空気に拍子抜けしました。それから約1週間後に長男をお与え頂き私も出産に立ち会うことが出来ました。一連の出来事の中で、もしかしたら長男の出産に立ち会えないだろうなど何度か頭をよぎりましたが、それはそれで仕方ないと思ひました。妻にとっては不安もあつたんでしょうけど子供は無事生まれてきてくれるだろう。をびや許しを頂戴し、妻

も元気でいてくれるだろうと信じていました。たとえ立ち会えなかったとしても私は、おたすけで神様の御用で立ち会えなかったのですから。更に言えば、今の時代病院の設備も薬も医学もすごく進歩し、子供を産むことに対して大変ではありませんが命を落とすことはほとんどありません。そう考えますと、今の時代はありがたい限りです。教祖の時代の出産は本当に大変であつたと改めて考えました。当時、出産は命がけの行為で、今あつて当たり前のものがなく、それはコロナ禍の中マスクが同じくらい重要で、品薄にもなりましたアルコールの存在がないのがすごく大きかつたと聞きます。細菌という存在を知らなかつたので消毒という概念がなかつた。だからお産の時に消毒が出来ないという事は、子供を産む時にお母さんの体の中に細菌が入ってしまう事なのです。ですから出産後、母親の体は体内に入った細菌と戦うのです。そしてその戦いに負けて命を落とすということは珍しいことではなかつたのです。赤ちゃんもせつかく生まれてきたのに、まだ細菌に対しての抵抗力が少なく、菌に負けてしまい、1才の誕生日を迎えることが出来ない

子が多かった。本席飯降伊蔵先生もそんな出産にまつわる出来事に悩まされ、お産によって命の危険にさらされ入信したのであります。元治元年5月今から150年前、飯降先生の奥様おさとさんは妊娠しましたが、お腹の子は流産しておりました。伊蔵さんからするとおさとさんは3人目の奥さん、実は1人目の奥さんとの間にも子供を授かり出産しましたが、奥さんは命を落とされ、生れてきた子供も2歳で亡くなっています。この状況、伊蔵先生が特別運が悪かったのではなく、どこにもある話です。そして、おさとさんも体に負担がかかり寝込んでしまい、伊蔵先生からしたらまたかという思いです。大工の仲間から庄屋敷村に安産の神様が現れたと聞いて、早速おちばに帰らせていただき「妻の病気を救って下さい。」と必死になって教祖をお願いしたと思います。そして教祖から散薬を頂いた。これだけで伊蔵先生は大喜びです。なぜかという皆さんが今、目の前で自分の大切な人が苦しんだらどうですか。用木でしたらおさづけを取り次ぎますが、世間の人は救急車を呼んで病院に運んでもらいませぬ。でも教祖の時は電話機も救急車も

ありませんし、医者と医療と人間が直結していない時代です。普通の人は簡単に医者にかかることができない。仮に医者にかかって薬をもらっても、その薬も効くのかどうかよく分らない事が多かった。そんな時に安産にしてやろうと言われて手を差し伸べられ、散薬を下さり、これがどんなに有難かつたか。すがりつく何かが現れたことが嬉しくて、嬉しくてたまらないわけです。藁にもすがれる気持ちで教祖に会いました。よく分からないけど散薬を頂いたから飲ませてみようとおさとさんに上げたところ、なんと気分が良くなった。少しのことですが、伊蔵さん本当に喜びます。何にすがればいいのか分からない気持ちに、まるで一筋の光が差し込んだ気持ちになったのです。翌日お屋敷へお礼を申し上げに参り、更に散薬を頂くと、夕方から大層楽になった。伊蔵先生は夜またお屋敷に帰り、おさとさんは3日目には食事ができるまでにご守護頂いた。日ならずして産後の煩いをすっかり全快されたという話がございます。今の時代も出産というものは大変なものです。教祖の時代はまさに命懸け。私は当然、出産に伴う苦しみや痛みの大変さは想

像の範疇を抜けないのですが、妻の安否を案ずる伊蔵先生の気持ちの方は想像しやすいかなと思ひ、もし自分ならと伊蔵先生を重ねてみたことがありません。もし自分が伊蔵先生と同じ状況だったらブラジルに行ったのか、そのままどんどん想像を膨らませてみましたがすぐにやめました。考えてみたくもなかったんです。それぐらい嫌だったんです。そういう状況を伊蔵先生は実際に味わっていたのだと。これだけ大変な思いをして子供を産むわけですから、子供は本来本当に大切なありがたい存在なんだと感じました。特に道につながる子供たちは道の宝でございます。この宝物を大切に丹精していかなければなりません。小さいうちは分りやすいものから、私の場合はありがとうという言葉だったり、感謝をする心をよく子供に教えたりします。先程の伊蔵先生は教祖に救って頂いた後、あまりの嬉しさと有難さに、神様の社を造らせて頂きたいと申され、教祖はお礼の気持ちがあるのなら社は要らないから、小さいものでもいいからつとめ場所を建ててもらいたいと仰いました。どの位のものか伺いますと、1坪四方といわれ、畳2枚分がいいから、

おつとめをする場所を造ってほしいと仰せられました。伊蔵先生は快く承り、つとめ場所の建設が始まりました。しかし、当時奈良県の周りで何が起こっていたかと申しますと、京都で大きな火事があり、大阪では戦争があり、火事や戦争によって、京都や大阪は木造住宅がどんどん壊れてしまい、壊れた木造住宅を立て直そうということで、奈良県はもともと木材が有名なので、木材がどんどん京都や大阪に流れていったのです。それで奈良県にある木材が品薄になってしまい、値段が跳ね上がったんです。これはこれからつとめ場所を造ろうという伊蔵先生にとつては、あまり都合のいい話ではありません。それでも伊蔵先生の救けてもらった感謝の心の方が大きすぎて、又、伊蔵先生のように教祖に救けられた人々の感謝の心の方がはるかに大きすぎて、木材の値段が高くなり、教祖は畳2枚だけでいいと言っているのに、もう少しだけ、もう少しだけと建設する建物の大きさはどんどん大きくなり、最終的には畳42枚程の広さの建物が出来上がった。これがつとめ場所です。つとめ場所は伊蔵先生が救けていただいた喜びから感謝の心で建てられ

たものです。私は子供達に、教祖の記念建物の見学をすると絶対この話をします。伊蔵先生が救けていただいた背景には、この感謝の心というものが大変大きいように感じます。教祖から散薬を頂き、少し気分が良くなったからお屋敷にお礼に行きます。更に、散薬を頂いて、つわりが良くなったから、またお屋敷に行きます。また良くなればお屋敷にという具合に、感謝の心から足繫く何度も何度もお屋敷まで足を運ぶんです。私達は自分や近しい人の身上に苦しみ、事情の悩みを直面した時、親神様に救いを求めるわけですが、ただ救けて下さいと願うばかりでなく、既に与えられているご守護、ちよつとのことかもしれないが、そのご守護に対して感謝の心を忘れてはいけないなど思うのです。年頭幹部会で「教祖のひながたを目標に、教えを実践し、子供たちに信仰のありがたさを伝えよう。」と活動方針が打ち出されました。信仰の喜びを伝えようという表現はよく聞きますが、信仰のありがたさを伝えようというのにはちよつとめずらしい表現だと思えます。次に、重点項目の取り組みが大事になってきます。「子供に教祖のお話をしよう。」「教会おと

まり会、教会こども会を実施しよう。」「地域で少年会ひのきしんを実施しよう。」とあり、同世代の子供達が集まり、信仰実践を積みながら教祖のお話を聞いて、信仰のありがたさを味わって頂く時間は本当に大切です。年頭幹部会で真柱様は、「みなさん方には少年会の活動を通して、しっかりとした信仰の基礎を、子供たちの中に築いてもらいたいと思います。そしてそのために、先に道を歩いているみなさん方自身が、日頃から、親神様、教祖の親心を求めて生きることを心掛け、成ってくる姿にたんのうの心を治める努力をしながら、自分の信仰をより深め、親心に近づく修練を重ねて頂きたいのであります。おさしづに、「道に外れたる心で育てようと思うた処が育たん。」(明33・1・4)とあります。ともすれば忘れ勝ちになりやすい、人を育てる上の大切な注意点をお諭し下さっているのではないかと、と悟らせて頂くのであります。」という一節があります。少年会活動に携わる者の最大の目的は、子供たちを立派なようぼくに育てることにあります。ですから、育てるといふ処に意識が行き過ぎて、時には自らの成人に対しては、疎かに

なってしまうこともあるかもしれません。しかし、まずは自らが信仰を深めて、親心に近づく努力をして、信仰のありがたさを味わうことが大切です。自らが信仰のありがたさを味わい、そして、それを子供たちに伝える。この取り組みをする上でとても効果的なものが子供おぢばがえりです。本年は、「子供とおぢばがえりの喜びを味わおう」、「全教会からの帰参を目指そう」と掲げています。子供おぢばがえりは、子供をおぢばに連れて帰ることが最大の目的です。そして、何とか子供たちに楽しい思い出を残してあげたいという思いで、育成会員の皆様方が真実込めて取り組み、その思いは神様が必ず受け止めて下さいます。一人でも多くの少年会員たちと子供おぢばがえりにご参加いただく事をお願い致しまして、本日の私の話を納めさせて頂きました。どうもありがとうございます。

(文責：副団長 藤井保人)

雅楽講習会 開催

5・28 大教会

雅鶯会

雅鶯会(田中隆之楽長)は5月28日大教



管別練習 (箏)



管別練習 (笙)

会で雅鶯会員を対象とした雅楽講習会を開催、教内外から3人の講師を招き、



合奏練習



管別練習(龍笛)

雅鶯会員15人が参加した。午前9時半開講、大教会長様のご挨拶

5月30日、大教会で、本部婦人・3代会長夫人上原くにゑ子刀自30年祭、4代会長上原郁雄大人30年祭、4代会長夫人せい子刀自10年祭が、大教会世話人板倉知幸先生の祭主で勤められました。午前11時開式、正午過ぎ終了、親族家族また芦津、玉島などの関係教会長・部内教会長が参列しました。終了後部内教会長はじめ参拝者には弁当が配布

本部婦人 上原くにゑ子刀自
4代会長 上原郁雄大人
同夫人 上原せい子刀自
式年祭 執行

拶に続き、田中楽長からは「一人一人の技術の向上を」と挨拶。その後、各管に分かれて練習、昼食を挟んで15時より合奏練習を行い17時半閉講した。夕勤め後には講師の方や会員同士の親睦を深める会食が行われ、1日のみの開催では有ったが、大教会年祭を間近に控えての講習会でもあった為、事前の練習を兼ねての非常に内容の濃い充実した講習会となった。
(雅鶯会副楽長 山野弘実)

▼種々の思い出
ある日の事。「ターンバイク走ってみるか?」「高速道路?」「そうや」という事でニューヨーク・ターンバイクを兄の運転で走った。驚いたのはレ



左側に親族、右側に関係教会長らが参列した

され、また親族家族の主立った者、関係教会長方は席を分けて会食、午後4時過ぎ現地散会となりました。
(大教会理事 上原繁道)

私1カ月余りで一人帰ってきた。ケネディ空港からハワイ経由の飛行機で私はハワイで伝道庁に寄らせて頂いた。この時団体客と一緒に、皆機内でアロハシャツに着替えているのに不思議な感覚だったが、2月厳寒のニューヨークで私は背広にコートを着たままだった。ホノルルで降りて蒸し暑さになる程と思った。2日ほど伝道庁にお世話になり、羽田に帰ってきた。東京駅の八重洲口で東悠の美智子奥さんに

末の弟のまなざし
3
ンの多さだった。輸送トラック用レーンが6車線くらい、乗用車用レーンが4車線くらい、もっと多かったかもしれない。アメリカという国の国土の広さと物流の莫大さ、その経済力に驚いた。その驚きを兄はあの日私に感じさせたかったのだろうと思う。また、ある日の事。「マンハッタンで食事しようか」という事でこの頃はやりだした和食専門店に連れて行ってくれた。カウンター席で、日本人料理人が向こうに居て、天ぷら、寿司、丼物何でもどうぞ注文を、という形。兄と1時間ほど過ごして、その日はニューヨークセンターに行ったように思う。兄は出来たばかりのセンターの所長であった。

会って、あまりにも荷物が多かったので、土産代わりに少し教会に持って帰って貰ったのを記憶している。

2回目に行った時は、布教所はポールドインに移転していたように思う。子ども達も皆大きくなってそれぞれに家を出て別所帯になっていたのかなあ、滞在中、ほとんど会わなかった。この時は私は一人旅で、ロサンジェルス、クリッチフィールドさん、サンフランシスコのネイデイさん、オレゴンのキッシンジャーさん、また金浦の信者さんの樋上さんと、あちこち訪問させて頂いて兄の処に到着した。何を話したのか、何を聴いたのか、海外巡教という事で、1週間程インデアナの豊明兄の処にも滞在して、アメリカの道をどこかに纏める事はできないものかと、兄弟の心の内を聴いたように思う。伝道序で、当時の篠森庁長さんともお会いして話を聴いて頂いたように思う。

音楽鑑賞は捨てていなかった。真空管のアンプでクラシックを聴くという贅沢を、この時も私は少し味わわせて貰った。ずっと後になるが、本部の神殿奉仕当番で日本橋の町田さんと一緒になった時、彼の趣味がやはり真空管アンプにあった事で話が弾んだのも、懐かしい思い出である。もうずいぶん前に彼も鬼籍に入った。

眞雄兄にとつては、私はたった一人の弟という事で、年祭毎に日本に帰って来た時には、皆部分教会に行ったり、蒜山まで出かけたしたりした事もあった。何故か道江姉と一緒に帰って来た事はなかったように思う。布教所を留守にする訳にはいかなかったのだろう。

昨年は、CDにクラシックを録音したり、ハウゼが日本のなじみの曲を編曲してタンゴに纏めた曲を送ってくれたり、彼は五木ひろしが好きだったので、送ってあげたり、そんな中今年に入って、突然の別れだった。今大教会の墓地の一面に墓標が建っている。一言も物を言わないが、前で手を合わせると、心の中にいろんな場面が浮かんでくる。89歳。長生きだったと思う。私も、もうすぐだなど思ってしまうこの頃です。

この項続く

五月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には一列子どもの陽気ぐらしを楽しみに 変わらぬ親心と御守護のまにまに 日々は結構に恙なくお連れ通り頂いております 誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は暖かく過ごしやすしい新緑の季節に 山や森のみずみずしい若葉が心まで潤してくれるように感じつつ 朝夕に御礼申し上げます たすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日はこれの名称にお許し下さいました御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 五月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には 今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供たちが相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げ 尚も変わらぬ親心にお縋りする皆の誠真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて今月は直轄教会に巡教を実施し 教祖百四十年祭に向かう三年千日の中ごろを迎えようとするこの時に それぞれの教会で定めた目標に向かっての歩みについて再確認させて頂きました また本日は祭典に引き続き少年会育成講習会を開催させて頂きます お聞かせ頂く一つ一つの事柄をしっかりと胸に治めて 次代を担う子ども達の育成の糧にさせて頂く所存でございます

何卒親神様には 旬にふさわしい成人を目指して たすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受取り下さいまして 万たすけの上に自由の御守護を賜り お望み下さる陽気づくめの世の状に 一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十七年 五月月次祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	おつとめてをどり	地方	役割	区分	講話	祭主	扨者			
											坐り勤					少年会育成講習会	大教会長様	中村道徳
											前					七月講話	浅野明教	上原繁次
後	岡崎真一	田中隆之	田中豊子															
今川佐智子	門脇加津	上原順子	岡崎治喜	中村義太郎	中村剛	佐藤道孝	吉岡壽	田中隆之	田中ますみ	前奥様	大教会奥様	上原繁道	前会長様	大教会長様	佐藤真孝	森本忠善	門脇元教	
岡崎豊子	田中つかさ	内海安子	上原繁次	高木昭祥	上原繁道	渡邊隆夫	内海史郎	山野弘実	上原千枝子	山野なつ	谷内美知子	虫明立生	上原浩	岡崎真一	岡崎治喜	中村道徳	上原志郎	
室悦子	中村初美	三島照美	杉原善朗	佐藤真孝	田林久嗣	谷内秀自	赤木素志	浅野明教	吉岡八恵	横山小智榮	武内正美	横山逸郎	吉岡誠一郎	中島誠治	岡田誠	上原浩	佐藤道孝	



皆さん、ご存じですか。道友社発行の月刊誌『人間いきいき通信』（天理時報特別号）が、2023年1月号からリニューアルされて、『天理いきいき通信』と改称されたということを。それに伴って巻頭も、天理のシダレザクラをサクラポールとして世に広く紹介した、写真家の藤波秀明さんに替わられたということ。私は、それまでの挿絵の方が好きです。

昨年、西菌和泉先生の講話を聞く機会に巡り合いました。先生は、定年となる2021年まで天理中学校美術教諭を勤められました。先生が特別号の表紙の挿絵を描かれた期間は、2001年1月号から2022年12月号までの22年間という長い年月でした。私が、特別号と言えば表紙の挿絵が醸し出す穏やかな世界と感じ取っていたのも無理はありません。私は、興味本位で西菌先生の最後の特別号を1部おやさど書房で取り寄せてみました。そこには特別でないいつも通りの挿絵「冬日」が描かれていました。そして、表紙のはなし欄には次のように書かれていま

す。「僕の風景画は、すべて現地で描いています。春夏秋冬の光と風を感じながら風景と一体となります。アウトドアが僕のアトリエなのです。」先生らしいコメントだなあと感じました。絵手紙教室とセットで行われた西菌先生の講演会、是非「高屋便り」の絵手紙教室にもお呼びできればいいのになあと密かに願っています。

もう一つ、西菌先生とのちょっとした御縁を書き添えます。それは、一昨年の夏、修養科教養掛に行かせていただいた折、参拝後に神殿説教で東井先生(元天理中学校長)のお話を聞かせていただいたときのことです。その中で、西菌先生が不登校になった生徒に対して、神殿でのお願いづとめに一緒に行くかと誘われ、その生徒が毎日参拝にくるようになり、いつのまにか登校するようになったという内容のお話でした。ちばの理と人のたすかりを願う心が、内向きにちよつとだけ休息していた彼の心を動かし始めるきっかけになったのだと感じました。そのことを、西菌先生へお話すると、「そんなことがありましたね、その通りですよね。」と、穏やかな表情で話されました。「ちばの理」と「たすける心」を大切に、年祭活動2年目を歩んでいきたい。

(友)